

印協會會報

第八十六號

日

次 目



昭和十九年五月三十日發行

卷頭言

○アッサム州突入の日印同盟軍

○ボース首班大講演會

●印度の獨立と大東亞の大義

○文學博士 宮本正尊

二

●印度獨立を宣明して日本國民諸君に訴ふ

○チャンドラ・ボース

三

●印度に於ける飢饉の今昔

○農學博士 早川直瀬

四

●邦樂の南方及印度進出問題

○日印協會

五

●ヒンツウ政治制度と其の理論(一)

○ビー・ケー・サルカル

六

●印度回教問題に就て(三)

○廣瀬文雄

七

●印度の雨

○櫻井義肇

八

●印度回遊五千哩(七)

○谷一東

九

●雜

一

○最近に於ける印度問題の經過○印度國內情勢の推移○大東亞共榮圈に於ける獨立運動の發展○假政府の

對英米宣戰布告○ボース首班大東亞會議に出席○軍事情勢

○ボース首班一行歡迎晚餐會○ボース首班大講演會○邦樂進出問題研究會○寄附行為一部改正○理事的新

任○理事の更迭○安川理事の逝去○印度反英抗爭史展覽會○日印協會評議員會○日印協會總會○印度國民軍激勵電報○會員の詐報○新入會員○會費領收報告

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

な清水が滔々と音を爲して流れてゐるのは、何と言つても氣持が良い。又この山々が得難い背景となつて一層の美を増してゐる。

この庭はモーガル王朝の全盛時代に造られた夏の離宮で、デリー城の殿上人共が毎夏此處に暑さを避けて來たものださうである。

籠の上のバビリヨンには椅子や卓子が用意されてあつたので、私共は此處で用意して來た辨當を開いて、この古い歴史の香り豊かな環境の中で楽しい晝食をした。

食後一休みして、此處を出發してノールトン氏の望みで約五六哩離れた處に今建設中のセメント工場を見に行つた。まだほんの整理工事位のもので工場らしいものは出來てゐなかつた。例のラオ君が來て地質の調査をした處である。此處から再びカルカヘ引返し、ノールトン氏と別れたのは早夕方の六時頃であつた。

汽車の出發は夜中頃なので、驛の食堂で夕食を済まし、一時間程カルカの町を散歩して、九時頃驛に歸り既にホームに這入つてゐた。列車に乗り込んで寝ることにした。丁度二人用のコンパートメントがあつたので、車掌と話合ひを付けてこれを占領した。

この列車の後部には鐵道會社の重役の専用車が連結してあつた。それは實に贅澤なもので、大形の客車全部を使用して、居間、食堂、寝室、其他料理室使用人室等完全な一軒の家である。居間には安樂椅子やスタンダ等住宅と同じ様な調度でピアノまで備へてある。それは必要とか安易とか言ふ問題は通り越して了つて單なる示威的な手段としか思へない。

汽車は私達が寝てゐる間に動き出して、懷かしのアンバラ・ジャングションも知らぬ間に通り過ぎて、朝の六時頃には早デリーの近郊を走つてゐた。

雜 暑

最近に於ける印度問題の経過

昨年九月以来昭和十九年一月に至る六箇月間は、印度獨立運動史上永遠に記録されるべき幾多の重要な問題の生起を見た。其の主要なるものを擧ぐれば、一、印度の食糧飢餓（八月、九月、十月）二、自由印度政府の成立と我國の承認（十月）三、假政府首班ボース氏の大東亜會議出席（十一月）、四、アラカン作戦に於ける印度國民軍の參加（二月）等である。因つて本號に於ては上記の諸問題を中心として印度問題の推移を略述しよう。

印度國內情勢の推移

政治方面では印度政府と國民會議派とは依然對立を繼續し、特に印度政府側の強硬態度は、食糧飢餓其他凡有する問題を通じて露骨に表現せられ、民衆の憤慨と怨嗟の的となつた。印度國民の動向としては最も注目されるべきは、假政府の成立と共に反英地下運動組織が強化擴大された事で、是は將來印度國民軍の進撃に伴つて異常なる效果を生ずるであらうと期待されて居る。

本期間に表面に現れた問題中最も重大視されたのは、九月及び十月を中心とする食糧飢餓であり、是は印度や英國で問題化されたばかりで無く、其の成行は全世界注視的となつたのである。抑も

最近に於ける印度問題の経過 印度國內情勢の推移

附記 前稿の筆を擱いてから、早二年に近い時が過ぎた。

この間に、世界の様相は驚く可き速度で變化した。大東亜戰爭の大戰果により、過去數百年の間アングロサクソン民族の爲めに汚された東亜の土は完全に清掃された。今や大東亜全域に亘り、彼等侵略者の姿は見られない。十億の東洋民族は、初めて自己本然の姿に立歸り、東亜共榮圈建設の爲めに雄々しく立上了つたのである。

然しながら決戦はいよいよこれからである。吾等は何んな事があつても勝ち抜かねばならない。勝利なくして東洋民族の解放も東亜共榮圈の建設もあり得ないのである。筆者は一昨年から約一年間ビルマに在つて、前線に於ける皇軍將兵の勇戰奮闘とその勞苦を見聞し、又其他の占領地を親しく見る機會を得て、今次戰争の持つ劃期的な意義を深く認識することが出來た。この様な事情から本稿も暫く中絶して居つた譯である。

元々此の稿は仕事の合間に書き續けて來たので、稿を起してから既に五年になる。印度に對する一般の關心が強くなつた今日とは言へ、この旅行記はしさか舊聞になつて了つた感はあるが、筆者以後に印度を旅した日本人の中で、あれ丈け廣く歩いた人は少い様に思はれる。折角これ迄書いて中止するのも殘念な氣もするので、日印協會の勧められるまま、再び書き續けることとした。

方法で且つ緩漫に行はれたに過ぎなかつた。

以上の様な英國の無責任極まる態度に依つて、印度の食糧問題は何うなつたかと言ふと、八月中旬には早くも大飢饉の到來となり、ニユーズ・クロニクル紙の報道に據れば、ベンガル州の状況は特に深刻を極め、八月十六日乃至二十一日の六日間に、甲谷陀市内の行倒れは八百人に上り、コレラ、チバス等悪質傳染病の蔓延に依る一週間の死者は一千百二十九人に達したのである。ベンガル州の外に飢饉の甚しい地方としては、ボンベイ州、マドラス州竝にコチン藩王國、トラヴァンコール藩王國等であると傳へられた。即ち食糧飢饉の中心は大都市及び船舶等に依つて食糧を外部からの移入に仰げる地方である事が明らかになり、國內輸送力の不圓滑が多數の餓死者を出す直接原因になつた事を暗示して居るのである。其後も印度政府は依然として此の事態の儘に放任した爲め、約一箇月後の九月十五日の報道に據れば、甲谷陀市内だけでも連日数百人の餓死者を生すると云ふ慘状を呈するに至つた。又農村の状況も悪化の一途を迎り、『村民が一日二回の食事をして居る村は一つも無い』『幼児の賣買が行はれて居る』などと悲惨な状況が相次いで傳へられた。

九月二十三日ロイター通信社は、當局筋の意向として食糧難の原因に就き次の如く報道したが、之に依つても政府の施策の不徹底な事が如實に現れて居る。即ち『印度政府の當面する食糧問題には三つの原因がある。第一に公開市場で、食糧並に穀物類を手に入れる事の困難な事情、第二に各地方に食糧を配給し、食糧の餘剰ある地方から不足な地方に食糧を移出する事の困難な事情、第三に土地を所有せざる印度人に對し特に食糧不足の地域に於て實際上食糧を配給する事の困難な事情等である。』斯る食糧飢饉の深刻化は當然全印度銀行券の流通高は次の如き増加振りを示して居るのである。

(單位百萬留比)

一九三九年九月	一、九一四	一九四三年一月	五、八六三
一九四〇年九月	二、二一三	一九四三年四月	六、六七〇
一九四一年九月	二、五八七	一九四三年九月	七、四九八
一九四二年六月	四、四三二		

斯る通貨膨脹は當然物價の奔騰となつて現れ、印度政府の發表に據れば、『開戦直前の一九三八年九月を一〇〇とする一九四二年十二月現在の物價綜合指數は二三八であるが、特に食糧料品に於ては騰貴率が著しく、平均四一を示して居る』と言はれ、アーリー印度事務相の言明に據れば、ベンガル州の米價は戦前の約八倍に上つて居ると云ふ。物價の騰貴に基く國民生活の困難は今後も益々深化して幾多の派生的事件を生起せしめて行くであらうから、十分の注意を要する。

大東亜共榮圏に於ける獨立運動の發展

(九九)

印度人民は一七五七年ベンガルに於て英軍の爲め再度の敗北を喫

度的な反政府意識を激發し、各處に於て暴動が惹起したのみで無く、英本國の朝野に對しても漸く重大な反響を捲起し、議會に於てはアメリーア印度事務相に對する質問が續出する状況を呈した。依つてアメリーアは九月二十三日下院に於て此の問題に就て概ね次の如く答辯して英政府の見解を明らかにした。『印度に於ける食糧不足の主要な原因是、ベンガル州の米の不作、緬甸からの輸入杜絶、五千萬農民の一部の賣惜み、一部商人の買溜、竝に地方行政機關の對策失敗等である。既に印度政府では孟買其他の大都市に全面的な配給割當制を實施し、甲谷陀市に於ても十一月から割當制を實施する豫定である。以上が目前緊急の対策であるが、更に長期対策を検討する爲めに、七月印度食糧調査委員會を任命し、委員會の報告書が二十三日總督の手許に提出されたので、委員會の結定乃至勧告に就き印度政府が何等かの所見を開陳するのを待つて居る。尙ほは他の議員の質問に對して、『問題は主として分配に係り、既に一箇年に亘り印度政府は多種の食糧品を輸入して居る（註：實際に輸入された物は多分軍需の食糧品となつたのであらう）。ベンガル州政府も亦廣汎な範囲に亘つて食糧の徵發を斷行した。印度の各州には自治的な閣僚（註：印度人）が任命されて居るから、食糧の不足に就ても憲法上第一の責任は印度各州政府が負はねばならない』と答辯した。此の責任回避の言明に對して、各方面からの非難攻撃が熾烈であつたのは當然であるが、英當局は飽く迄も現實に眼を蔽ひ、效果的な施策を實行しなかつた。驟て十月、十一月となり、新米の收穫を見ることに至つて、飢饉の程度は漸次緩和され得たが、約半歳に亘る食糧不足に依る餓死者は數百萬人に達し、其後現在も尙飢饉に附隨する惡疫が各地に猛威を振ひ、多數の人命を奪ひつゝあるのである。

大東亜共榮圏に於ける獨立運動の發展

スバス・チャンドラ・ボース氏は、昭和十八年七月昭南に於て印度獨立聯盟總裁に就任し、爾來同聯盟の再組織と印度國民軍の改編強化に努力中であつたが、本國に於て多數の民衆が食糧飢饉に悩む状況を開き、九月下旬米穀十萬噸を輸送する意志ありと放送した。印度政府側は之に對し何等答ふる處がなかつたが、ボース氏は同月二十三日より三十日迄緬甸を、三十日より翌十月四日迄泰國を訪問し、兩政府の援助を求めると共に在留印度人を激励した。其後ボース氏は十月二十一日午前十時半より昭南の大東亜劇場に於て印度獨立聯盟全東亞代表者會議を開催した。此の會議には馬來を初め、日本、滿洲、泰、佛印、ジャワ、ボルネオ、スマトラ、緬甸、香港、比律賓、セレベス、廣東等東亞代表竝に印度國民軍婦人部幹部が出席し、印度國歌齊唱に依つて歴史的會議の幕を切つて落成を行つた。全代表は直に之に賛成し、政府主席にボース氏を推舉したので、ボース氏は『予は總會から託された權限に基き茲に假政府を樹立する』と宣言し、遂に印度人待望の自由印度假政府が成立した。次に同日假政府が發表した宣言、ボース氏の聲明及び假政府首腦部の陣容を採録する。

自由印度假政府宣言全文

大東亜共榮圈に於ける獨立運動の發展

(一〇〇)

して以來百年間に亘り不撓不屈の戦闘を續けた。此の百年間、歴史は實に無數の比類無き義勇と自己犠牲の挿話を以て展開されて居る。ベンガルに於けるシラジ・ウド・ダウラ及びモハン・ラル、南印度に於けるハイデルアリ、ティップ・サルタン及びウエル・タムビ、マーラッタに於けるアッパ・サヒブ・ボンスレペシニウ、バジ・ラオ、オウドに於けるベノムス、就中一八五七年最初の印度獨立戦争を指揮したジャンシのラニ・ラクシミ・バイ妃、ナナ・サヒブ等の先烈諸勇士の名は、此の百年間に亘る印度獨立史上永久に燐然たる金文字を以て書き止められて居る。然し吾人の祖先は當時大規模なる用意を缺いた爲め、此の大敵に對し全國的共同戦線を以て當る事が出来なかつたのは、實に千載の痛恨事であつた。然し遂に印度人民は事態の重大性に目醒め、共同一致の行動を執るに至つた。而して一八五七年バハヅール・シャーの旗幟の下に印度人は自由なる國民として最後の戦ひに蹶起したのである。然し緒戦の段階に於ける幾多の輝しき勝利はあつたにも拘らず、戦利あらず且つ指揮上の誤算もあり、印度軍は一戦又一戦と破れ去り、全軍は遂に崩潰し、屈服の已む無きに至つた。印度人は英國の爲め無理矢理に武器を剝奪され、且つ彼等のテロと慘忍行爲に悟伏して仕舞つた。然し一八八五年印度は國民會議派の誕生と共に端無くも新なる覺醒の時が到來した。

一八八五年から第一次世界大戦の終末迄印度人民は失はれたる自由を恢復すべく民衆を激勵し、英貨不買同盟、テロリズム、罷業、而して遂に武裝革命に至る迄、有りと有らゆる手段を取つた。然し此等の努力は何れも成功を收むるに至らず、失敗に繼ぐに失敗を以てし、爲めに士氣を失つた印度民衆は、一九二〇年に及んでマハトマ・ガンディーが非協力不服從の新戦術を掲げて起ち上るや、舉つて此

を付けさへすれば良いのだ。其の口火を付けるのが即ち印度解放軍の任務なのである。若し印度解放軍が一旦祖國へ侵入すれば、國內同胞及び英軍麾下の印度人部隊の熱狂的な支援を受くべきは絶対確實である。外には勇敢不敗の盟邦の援助あり、而も又自らの力を頼む印度解放軍は、其の歴史的使命を必ず達成する自信に満ちて居る。祖國解放の日が迫りつゝあるの秋、印度人は此處に自らの臨時政府を樹立し、其の政府の指導下に最後の戦争を開始すべき重大責任を有する。然し有力なる印度獨立運動の指動者は悉く獄中に在り、國內同胞は全く武力を剝奪されて居る現在、印度國內に臨時政府を樹立し以て戦争を指揮する事は不可能である。故に此の任務は國內並に國外の愛國者の支援下に在る東亞の印度獨立聯盟が負ふべきである。即ち印度獨立假政府を樹立し聯盟の組織した印度解放軍（自由印度フアウジ即ち印度國民軍）の援助を得て自由獲得の最後の戦争を行う事、之が我等の任務である。此處に東亞印度獨立聯盟より印度獨立假政府設置を指命されたるにより、吾人は最大の責任感を以て此の任務を遂行せんと決意するものである。我等の任務遂行に、我等の祖國解放の鬪争に、天佑神助あらん事を。我等は祖國の自由幸福而して其の世界的地位の向上の爲に、武裝せる同志の生命を擰ぐる事を茲に誓ふ。假政府の任務は印度の地から英國及び其の與國の完全追放を目的とする一大鬪争を開始し、且つ之を指導するに在る。次で假政府は印度人民の意志に基き其の信頼の上に立つ自由印度の恒久的國民政府を樹立するの任務を有する。英國とその與國を擊滅し、而して印度の地に恒久的自由印度政府の樹立を見るの日迄、假政府は國民の信任を得て國務を執行するものである。印度人は一人残らず假政府に忠誠を致す義務がある。假政府は之を全印度人に要

大東亜共榮圈に於ける獨立運動の發展

(一〇一)

請する資格を有する。政府は全人民に對し信教の自由並に平等の権利と平等の機會を保證する。又政府は總ての人民を平等に訓育し、過去に於ける他國人政府が卑劣な手段を以て醸成し來つた凡有る國內的對立の障礙を突破し、全國民一人々々に至る迄の幸福と繁榮を自覺し追求するの堅き決意を茲に明かに宣誓する。神の御名に於て、全印度人が一國民として固く結ばれてあつた過ぎし時代の名に於て、而して勇氣と自己犠牲の尊き傳統精神を遺せる先烈諸勇士の名に於て、我等は全印度人に對し高らかに呼びかける、『我等の旗の下に來れ、而して印度の自由の爲めに敵を擊て』と。我等は此處に全印度人に對し要請する『印度に在る英國人と其の同盟者に對し一大鬪争を開始せよ。印度の地がら敵が完全に追放され、印度人が再び自由なる印度國民として起つ日迄、勇氣と忍耐と必勝の信念を以て此の鬪争を闘ひ抜け』と。

ボース氏聲明

過去二十二年に亘る公私生活を通じ、予は世界の歴史就中各國に於ける革命の一研究家として常に『自由への鬪争に於て印度に缺乏するものは國民軍と此の國民軍を戰はせる國民政府の二つである』との感を深くした。然るに今次の戦争に於て日本軍の收めたる赫々たる勝利の結果として、東亞在住印度人は印度獨立聯盟並に印度國民軍を組織するに至つた。此の國民軍の創設は東亞に於ける獨立運動に現實性と之が急速なる實現性を附加した。

若し國民軍を組織しなかつたならば、獨立聯盟は單なる宣傳機關以上に出でなかつたかも知れないが、國民軍の創設に依つて今や自由印度假政府の樹立が可能となると共に、其の實現が要請されるに

の不徹底乍ら殘された唯一の戰術に頼るより他は無かつた。爾來茲に二十年、印度人は強烈なる愛國的活動を示し來つた。祖國の自由回復の聲は印度の隅々に迄傳へられ、中央から最も邊鄙な山村僻地に至る迄、印度人は一個の政治組織に結合した。斯くして印度人は其の政治的意識を取戻したのみならず、再び一つの政治的體制を形成するに至つたのである。今や全印度は唯一の目標の下に一の聲且つの意志を以て努力する事が出来るやうになつた。一九三七年から一九三九年の間八州に於て國民會議派内閣が爲し遂げた事績は、印度人が今や自ら自國を統轄し得る用意並に其の能力を備へて居る事を證明した。斯くして今次大戰緒戦に於て印度解放の決定的鬪争の準備は完了した。此の大戰に於て獨逸は其の盟邦と共に歐洲に於て吾人の敵英國に徹底的打撃を加へた。一方日本は盟邦と共に東亞に於ける吾人の敵を粉碎した。斯る世界の情勢は現に印度人民に國家解放を實現すべき絶好の機會を齎すに至つた。近世史上未だ曾て例の無い海外在留印度人の政治的蜂起、完全なる團結も亦茲に實現した。此等在外印度人は今や國內同胞と全く同一の思想と感情を有するに至つたのみならず、同一の歩調を以て一路自由への大道を邁進しつゝある。特に東亞に於ける二百萬餘の印度人が『總員蹶起』の旗幟の下に鞏固なる結盟を結んだのは實に空前の現象と謂はなければならぬ。其の先頭には祖國解放の爲めの印度軍精銳が『デリー・デリー』の雄叫びを擧げて進軍しつゝある。英國の僥幸主義は印度民衆を絶望の淵に呻吟せしめ、其の飽く無き掠奪は人民を飢餓と死へ追ひやつた。今や印度の民心は全く英國の統治を離れ去つた。英國の印度統治は既に人民の信賴と云ふ基礎を喪つて瓦解に瀕し、一觸即發の危地に陥つて居る。此の虐政を覆す爲めには只口火

大東亜共榮圏に於ける獨立運動の發展

(一〇二)

至つた。

假政府は何よりも先づ戰闘の組織であり、其の主目的は英國及び印度に於ける英國の同盟者を相手に最後の戰闘を挑み戰闘を遂行するに在る。従つて假政府は此の自由の爲めの戰闘を開始遂行するに必要な機關のみを以て構成される筈である。内閣は政府の行政部門を代表する者と政府の軍事部門を代表する者とに依つて構成されが、假政府の目的が獨立の爲めの戰闘に在る以上、軍の代表は當然閣内に於て多數を占める。更に普通の閣員の外に一定の政府顧問を置く規定が設けられて居るが、之に依つて假政府は東亜の全印度人と緊密にして組織的な連絡を維持すると共に、来るべき鬪争に於て一切の資源を之に動員せん事を期して居る。假政府が印度國內に移つた暁には、假政府は自國領土内に於て施政を司る通常の政府としての職能を開始する豫定であり、其際多くの新しい省が開設されるであらう。自由印度假政府の組織と共に、印度獨立運動は凡有る成功の前提條件を獲得した。殘る問題は只自由の爲め最後の鬪争のスタートを切るのみである。印度國民軍が印度の國境を越えてデリーへの歴史的進撃を開始する時、此の最後の鬪争の火蓋は切つて落される。而してデリーへの進撃は敵米英が印度から驅逐され祖國の國旗がニュー・デリーの總統官邸の屋上に翻る時初めて終焉を告げるであらう。自由印度假政府の組織と共に、印度獨立運動は凡有る成

自由印度假政府首腦部陣容

主 班 スバス・チャンドラ・ボース
軍事部長 主班兼任
外務部長 主班兼任

財務部長 アニイル・チャンドラ・チャタジー

宣傳部長 スピアル・アペデュライ・アイヤー

婦人部長 スワミナダオ・ラクシミ夫人

無任所閣僚 印度國民軍代表アジス・アーメッド中佐、同N.S.

バーガット中佐、同M.Z.キアニ中佐、同A.D.

シングル中佐、同J.K.ボンズル中佐、同グルザラ・ロガナダン中佐、同イーサン・カディア中佐、同シ

ヤー・ナワズ中佐

書記官長 A.M.サハイ

最高顧問 ピハリ・ボース

顧問 カリム・ガニ、デブナート・ダス、D.M.カーン、エラバ、J.シビー、サダール・イシヤール・シン

法政顧問 A.N.サーカル

日本帝國の自由印度假政府承認

昭南に於て成立した自由印度假政府に對し、帝國政府は不動の對印國策に基いて速に同政府を承認するに決し、昭和十八年十月二十二日廟議の確定を見たので、二十三日同政府當局に對し正式に右の旨を通告した。尙正式通告と同時に同日次の如き帝國政府聲明並に不動の國是を重ねて明らかにすると共に、同政府に對する全面的援助を確約した。

【情報局發表】 本月二十一日スバス・チャンドラ・ボース氏自由印度假政府を樹立したるにより帝國政府は本月二十三日右假政府を承認し直に此旨通告せり。

【帝國政府聲明】 今般スバス・チャンドラ・ボース氏を首班とする

自由印度假政府の成立を見たる處、帝國政府は右が印度人多年の念願たる獨立印度完成への一大躍進なることを確信し、之を自由印度假政府として承認し、其の目的達成の努力に對し有らゆる協力支援を爲すべきことを茲に聲明す。

右帝國聲明發表の前夜外務省調査局太田第四課長は東京中央放送局から『自由印度假政府の誕生を祝して』と題して放送を行つたが、是は假政府成立の意義其他に就て我々の言はんとする點を遺憾無く表現して居ると考へるので、左に其の全文を掲げる。

ボース氏こそ印度の解放者

英、換言すれば印度の完全獨立の獲得である。而して此の大目的達成の手段として強く迄武力に依るべしと主張する所に、ボース氏の印度國民主義運動に於ける特異な地位がある。所謂非武力不服從運動は壓制者たる英國人の道義心に訴へんとするものであるが、ボース氏は斯る消極的な手ぬるい方法で英國人を印度から追ひ出す事は到底出來ないから、須らく武力に依らなければならぬと主張するのである。

又ボース氏は印度の解放に同情を有し、援助の手を差し延べんとする諸外國の助けをかりる事を印度獨立の大目標達成に必要條件であると主張する。ボース氏は此の見地から第二次世界大戦開始の以前から、来るべき世界的動亂の際に、印度人は停滞無く起上り得るやう實力を養成する爲め、密に青年の訓練に努めて居つたと言はれて居る。ボース氏は東亜に姿を現す迄の一年餘獨逸に居たが、其際一時米國の輿論が印度に同情するかの様に見えた事がある。然しほス氏は、英國の友は總べて印度の敵であり、英國の敵は總べて印度の友であるとの堅い信念から、米國の帝國主義は正に印度の敵であると説いて居た。ボース氏は單なる煽動政治家でも無ければ破壊的な革命家でもない。英國の壓制から解放した後の印度の將來に對する具體的且つ合理的な近代的印度建設の方策を用意して居る事を知り、自分は一層ボース氏に對する尊敬の念を深めたのである。

例へば印度の社會問題に就て、印度に於ては宗教的階級的對立が常に印度の統一を妨げて居ると、英國人が印度を語る毎に口にするが、ボース氏は斯の如き對立こそ、英國の所謂分割統治政策の結果であり、新らしき印度に於ては斯る宗教的階級的反目は必ず消滅せしめ得ると言つて居る。臨時政府の構成を見ると、ヒンズウ教徒も

回教徒も肩を並べて參加して居る。又言語の問題であるが、印度の言語は大別して七つ、細別すれば二百餘に達するが、ボース氏は此の言葉に就ても十分研究して具體的な案を有つて居るので、新らしき印度の言葉はローマ字を使用するヒンドスターであると言はれて居る。

自由印度假政府は一世紀半前英國統治が開始されてより以來、最初の眞の印度人の政府たる點に於て大なる意義を有して居る。ボース氏は英米が武力を背景として印度を抑壓する以上、印度人は自らの武力或は他國の武力の援助を得て英米勢力を印度から撃擣する事こそ、獨立達成の絶対條件なりとなして居る。今回成立した政府は印度内に於ける英米の一切の支配を驅逐する事を目的とする事は其の宣言に於て述べられて居る。又印度國民軍は獨立聯盟の手を離れて新政府の直接の指揮下に立つ事になつたと云ふ事である。此の意味に於て如何なる妥協をも排除し、印度人を武装し英米を徹底的に印度から掃蕩すると云ふボース氏の年來の主張は、新政府に依つて正しく表現されて居るのである。新政府の目指すところはニュー・デリー進撃である。

翻つて印度國內を見ると、今日印度は空前の飢饉に襲はれて居る。ルーター電報に據ると、カルカッタ市内だけでも全市の餓死者は二千人以上に達して居る。此の原因は多年に亘る英國の惡政に依るものであつて、特に戰爭勃發、以來政府の無爲無能をいたく憤激して印度民衆の反英感情は益々深刻となつて居るのである。英國の情報大臣グラッケンは、戰鬪繼續中印度の政治問題は冷蔵庫に仕舞つておくと放言して居る位である。ガンジーを初め有力な印度獨立の志士は總べて牢獄に繋がれて、現在雄々しくも反英鬭争を叫んで居る。

本軍の赫々たる戰果擴大は、印度の東部並に東北部國境を突如日本軍の脅威に曝すに至り、印度支配當初來維持された英國の戰略は全く其の效果を失つた。幸にして東亞に於ける印度人は約二百萬を算し、印度獨立聯盟と印度國民軍の結成を可能ならしめた。而して其の活動は東亞に於ける印度獨立運動を何者も否定し得ぬ現實の力と化し、印度の解放を目指す第二の手段即ち假政府の設立を可能ならしめたのである。自由印度假政府の組織と共に有らゆる成功への條件は整へられた。後には只鬭争と自由獲得のみが残されて居るだけである。

本假政府が印度を屈服せしめた責任者たる米英に對して宣戰を布告したのは當然極まる措置であつて、印度の獨立黨員が英帝國に對し既に永年に亘り戰を挑んで來て居るのは全世界周知の事實である。然じ乍ら自由印度假政府は今回誕生したばかりであるから、米英兩國に對する我々の態度を闡明する爲め宣戰の布告を發する事が必要だつたのである。印度民衆は宣戰が米英兩國の爲め我々の過去に於て蒙り、現在も亦蒙りつゝある多くの不正に對する當然な報復である事を知つて居る。結論として余は唯之だけの事を言はう。我々は對米英宣戰が宣傳效果を狙つた聲ばかりのもので無い事を實際の行動に依つて證明するであらうと。』

問 假政府の樹立、對米英宣戰は印度國內に如何なる影響を與へるや。又現在首班が重慶政權に呼びかける言葉は何か。

答 我々の支持者は更に大きな感動を受け、此の運動の眞劍さを知るであらう。

問 對米英宣戰は印度國內に如何なる影響を與へるや。

答 重慶政權の一部には英米殊に英の對印政策の壓制に對して不満

假政府の對英米宣戰布告

のは、實に我がスバス・チャンドラ・ボース氏唯一人である。即ち新政府は言はば全印度四億の民衆を代表して成立したのである。

ボース氏の不屈の決意、祖國解放の燃ゆるが如き情熱、猛烈な反英の氣魄、此等は必ずや印度四億の民衆に甚大な刺戟を與へずに置かないであらう。

假政府の對英米宣戰布告

自由印度假政府は十月二十四日午前零時よりボース主班邸宅に於て第二回閱議を開催し、先づボース主班は日本政府より假政府が正式に承認せられた旨を報告し、之に對する聲明案文を決定し、次で英米兩國に對する宣戰布告に就き協議した結果、零時五十五分宣戰を布告し、同日午後市廳廣場に於て開催された印度民衆大會席上ボース主班より嚴に之を通達した。

【宣戰布告】自由印度假政府は英國及び米國に對し宣戰を布告す。

自由印度假政府主班 スバス・チャンドラ・ボース 尚ボース氏は同日正午假政府成立後初の記者會見を行ひ、帝國政府の正式承認を感謝すると共に、英米に對する宣戰布告が力強い實行を伴ふものである事を次の如く闡明した後、一問一答を行つた。

『日本政府の自由印度假政府承認は我々の自由の爲めの戰に最大の精神的支援を與へるであらう。余の第一の夢は印度革命軍組織につたが、自由印度假政府の組織及び日本政府の承認に依つて余の第二の夢も此處に實現された。斯くて余の前には第三の夢が殘されて居るのみであり、之が即ち今よりの自由を戰ひ取る鬪争である。而して余は此夢も亦達成されるであらう事を確信する。

歐洲戰爭の勃發は敵に最初の打撃を與へた。大東亞戰爭勃發後日

を抱き英米の政策を承認しない一派があると思ふ。假政府が樹立され宣戰を布告し更に進撃を開始する事態に至れば、此の一派の人達は更に其惑を深める事になる。即ち英米は今次戰争の目的を民主主義の擁護であると言ひ乍ら、實際に於ては印度の

自由を否定して居る。一方日本は正義の戰ひを唱へ、先に緬甸や比島の獨立を承認し、更に今回自由印度假政府を承認した。

此の二つの事實の何れが正しいかは既に世界に明らかで、重慶にも大きな影響を與へて居ると信ずる。唯現在の如く英國が印度の支配権を握つて居る限りに於ては、重慶は抗戰の無益を悟るには至らず、緬甸公路の再開に期待を掛けて居るであらう。

然し一度印度國民が印度國內に進撃し、ベンガル、アッサムを解放した暁は、必ず重慶に呼びかけるであらう。

今後獨立達成の重大役割を果す國民軍の士氣如何。

答 過去數箇月間に國民軍は名實共に大なる飛躍をして居る。將兵達は口々に「デリーへ、デリーへ」の合言葉を以て士氣昂々軒昂たるものがある。

東條首相假政府援助を強調

東條首相は第八十三臨時議會第一日の去る十月二十六日貴衆兩院に於て施政方針演説を行つたが、其中で特に印度問題を取上げて次の如く陳述した。

『斯くて印度に於ては志あるものは悉く牢獄に投げられ、無辜の民衆は總て餓死に泣く。此れ正に世界の悲劇であり、人類共同の痛恨事であり、我々の斷じて放棄し得ざる所である。此秋に當り、印度の志士スバス・チャンドラ・ボース氏の下に、豪傑の印度人は、祖

國解放の爲めに結束して起上り、去る十月二十一日、印度假政府の樹立を見るに至つた。此處に於てか帝國は直に二十三日同政府承認の意志を表明致したのであつて、今後帝國は同政府を飽く迄も支援し、印度の獨立と解放の爲めには凡有る力を致さんとの決意を本議場を通じ中外に聲明し得るは我々の欣快とする所である。蓋し印度の完全なる獨立と自由と而して印度四億民衆の永遠の繁榮こそは帝國の衷心より念願する所である。而も此の帝國の目指す所は大東亜全民族の心からなる協力を得るは勿論、更に全世界の人士の志を得るものなる事を私は信じて疑はない。而して私は此の澎湃たる印度解放の氣運と、逞しき大東亜民族の協力とは必ずや印度に其の獨立と自由と繁榮とを齎す日の遠からざる事を確信するものである。』

ボース主班大東亜會議に出席

スバス・チャンドラ・ボース氏はサハイ無任所相、ハッサン祕書官、ラージュ軍醫中佐、ボンスレー中佐、千田司政長官、山本大佐等を伴ひ、去る十月三十一日午後羽田空港に到着した。帝國政府からは青木大東亜相、重光外相、天羽情報局總裁、陸相代理有吉陸軍中將、澤本海軍中將等、在日印度人ラーマ・ムルティ氏以下若干名が一行を出迎へた。據て大東亜省差廻の自動車に分乗した一行は東京に入り、ボース氏は宿舎に當てられた芝區三田綱町澁澤子爵邸に投じた。翌日は午前十時宮中に參内して記帳を行ひ、續いて東條首相を訪問、午後は明治神宮、靖國神社に參拜した。

十一月二日ボース氏は宿舎に於て記者團と會見し、其の所信を披露したが、是は自由印度假政府の今後の活動を考察する上に最も有力な手掛りとなるべきものであるから、其の全文を左に採録する。

問　自由印度假政府を樹立した原因は何か。

答　印度は今や榮譽ある獨立を獲得する最後の段階に到達して居る。此の爲め印度人自身が獨立運動の指導権を握る必要が生じて來た。又獨立運動に關する諸般の準備も一應完成の域に達したから、假政府を樹立した譯である。從つて今後假政府は總ての抗英運動を指導するが、印度に於ける一部分の解放に成功した時には假政府は印度國內の秩序維持に當り、又統治の任にも當る譯である。

問　假政府の誕生が印度國內に及ぼした影響如何。

答　印度國內に於ける反響は未だ直接知悉する事は出來ない。然し英國の統治始つて以來印度人の手に依つて政府が樹立されたのは今回が最初であるから、印度國內に及ぼした反響の蓋し絶大なるものである事は確信する事が出来る。又大東亜各地域に於ける反響は非常に大きなもので、熱烈なる聲援が今日次々に齎らされて居る。

從來印度獨立運動は二つの條件を缺いて居た。其一つは武器、軍隊を持たなかつた事、其二つは印度人に依つて組織された政府が無かつた事である。然し今や此二つの條件は完全に備り、獨立運動の具體的基礎が完成された。從つて敵陣營に於ても、假政府が齎した重大なる事態を無視する譯にはゆかない。今日我等は武器を執つて反英運動のスタートを切らんとして居る。

独立運動の具體的基礎が完成された。從つて敵陣營に於ても、假政府が齎した重大なる事態を無視する譯にはゆかない。今日我等は武器を執つて反英運動のスタートを切らんとして居る。之に對し東亜在住三百萬の印度人は絶大なる支持を約して居る。此外日本を始め盟邦各國も我等に聲援を與へて與れるから、米英は何うして之を無視する事が出來ようか。

問　假政府は近く緬甸に移轉するか、緬甸との今後の協力如何。

答　印度に於ける國內不安が米英の對日反抗作戦に及ぼす影響如何。今日印度國內には革命精神が溢れ、反米英的精神は最高潮に達して居る。米英側から的情報に據ると、印度民衆は何故假政府の要求を受けぬかといきり立つて居るとの事だ。從つて印度政府は非常なる不安に騒ぎられて居る。最近テリー放送局を通じ、假政府は印度へ米を送る前に何故緬甸、馬來に米を送らぬかと喚いて居る。此事實を見ても、彼等が如何に狼狽して居るかを知る事が出来る。

問　獨立運動は今後如何にして指導するか。

答　残された仕事は戰あるのみだ。假政府の組織は直接戰闘に必要な要素のみを以て組織したが、印度を占領した暁には、平和的統治に必要な機構を順次組織する積りだ。

問　今後の獨立運動に伴ふ一番の難事は何か。

答　再び言ふが、殘されたものは唯戰闘あるのみだ。印度に在る印度人部隊を我味方に引入れる事に就ては確信がある。茲で問題になるのは印度國內にある米英濠洲軍を破壊する事だ。之に關しても私は破壊し得る確信がある。然し此の確信は決して敵陣營の實力を過小評價した結果に出た事で無いのは勿論である。

大東亜會議は大東亜戰爭完遂と大東亜建設の方針に關し賜意無き協議を遂げる爲めに大東亜各國即ち帝國、中華民國、泰國、滿洲國、比律賓國及び緬甸國の代表が東京に參集したのであるが、ボース氏初め自由印度假政府の代表も陪席する事となつた。會議は十一月五日から開催され六日東條首相提案の大東亜宣言（共存共榮、獨立親和、文化昂揚、經濟繁榮、世界進歩に貢獻の五原則）を満場一致採擇した。同日午後の會議に於て緬甸代表バーモ首相が「印度の獨立

問

答　緬甸國は假政府を承認したので、緬甸國と假政府との關係は同盟的關係である。加之、私個人とバーモ緬甸代表との關係は極めて緊密であるから、今後緬甸國との一體的親善關係は益々強化される事を確信する。今回の假政府樹立に當つて忘れる事の出来ない意義の一つは、日本帝國が突如假政府を承認したもので無い事である。即ち日本の假政府承認は一貫した日本の大東亜政策から出たものである。大東亜の各民族を米英の桎梏から解放して大東亜民族の大團結を圖るのは日本の一貫した大東亜政策で、是は緬甸、比律賓兩國の獨立を通じて示されたものである事は疑ふ餘地は無い。

問

答　緬甸、比律賓更に日華同盟條約の締結等の事實と併せ考へる時、重慶に與へる影響は大きいと思ふ。斯うした事實を次々に目撃して居る重慶要人は今後如何なる政策を執るべきかに迷つて居ると思ふ。一部の親英分子は緬甸ルートの奪取を意圖して居るが、是は失敗に終る事は明白で、此時米英援助の頼む可からざるを知るであらう。

問

答　印度の食糧飢餓に對する所見如何。

答　印度の飢餓を救ふ方法は二つある。其一は食糧を滿載した船舶が飢餓救濟の爲め印度に直接行く事、其二は或る地點に食糧を送り、之を無條件に引渡す事である。印度政府は之を無視して居る。印度に於ける識者は米英から食糧を供給する事を要求して居るが、米英側は一向に供給しようとしない。彼等は印度人の生命に對しては無關心で全く冷酷である。

無くして亞細亞の自由無し」と喝破した外、大東亜各國の熱烈なる印度獨立運動支援に對し、ボース氏は感激を込めて次の如く不退轉の決意を表明した。

「自由印度假政府を代表して今回の歴史的大會議に出席する榮を得て衷心より感謝の意を表する。各代表の開陳披瀝された自由印度完成、反英武力鬭争に對する絶大なる御支援を眞に心強く思ふ。更に只今採決された大東亜共同宣言こそ共榮圏の各國が夫々唱道實踐して來たものを明確に表現したもので、此報一度印度に傳はれば、印度四億民衆の感激や想像に餘りあるものがあり、米英への打撃も亦甚大だと思ふ。我々の討英武力決戦愈々近きにある折柄我々の覺悟は絶對不動である。」

大東亜共榮圏の繁榮はアフガニスタン、アラビヤ人等全亞細亞人の繁榮である。印度獨立の問題に就き私の強調したい點は、印度は絶對に英國と妥協しない事である。他の國に取つて英國との和睦はあるかも知れないが、印度に取つては完全獨立か、然らずんば死滅あるのみである。私が此處で斯く述べて居る只今も印度では四億の同胞が米英の暴壓下に殺戮されつゝあるのである。又國民軍は印度に向ひ進軍しつゝあるが、其の幾人がデリーに到着し得るかを思へば私の臉は熱くなる。

斯くて我々は日本を初め東亜の各國が共榮圏建設を完遂せられん事を切望する。最後に私は本日の大東亜共同宣言が東亜延いては世界新秩序建設の大憲章となり、世界進運の上に一九四三年の大憲

章と呼ばれて使命を果さん事を切望する。」

以上の如きボース氏の演説が終るや、東條首相は突然起つて次の如き重大發言を爲し、アンダマン諸島及びニコバル諸島を自由印度從へさせられて鳳凰の間に出御、後藤式部官の通譯奉仕のうちボース首班に謁見仰付けられた。同首班は恭々しく御前に參進、謹んで敬意を表し奉れば、陛下には優渥なる御激励御慰勞の御言葉を賜ひ、畏くも御握手を賜ひ、天機殊のほか御麗しく入御あらせられた。光榮のボース首班は新生假政府の上に寄せさせ給ふ大御心並に御殊遇の程に感泣しつゝ、同十一時過ぎ恐懼宮中を退出した。

同日ボース氏は參謀本部に杉山參謀總長を訪問して種々意見の交換を行つた上、翌十一日は海軍省を訪れて島田海相、永野軍令部總長と懇談した。

十一月十四日には財團法人日印協會、大政翼賛會興亞總本部、翼賛壯年團共同主催の下に日比谷公會堂に於て講演會を開催し、先づ副島理事の開會の辭、興亞總本部長宮田氏の挨拶に續いて別欄に掲載せる如く堂々たる決意を披瀝した。

ボース氏は十一月十七日大東亜會議に陪席して任務を終了し、次で中華民國を訪問し、各地の視察、在支印度人の激勵等を行つたが、其外二十日及び二十三日の二回に亘り放送を以て重慶政權の反省を促した。特に第二回の「再び重慶に憩ふ」と題する錄音放送は、ボース氏の支那問題に關する見解を明らかにして居るので、左に其の要旨を掲載する。

諸君は多分中國の軍隊が重慶政權の手で印度に派遣され、英國政府の側に立つて戰つて居る事實を知つて居るであらう。此事は重慶

假政府に與へる用意がある事を明らかにした。

「印度四億民衆の宿望たる印度の自由と獨立と繁榮との獲得の爲め自由印度假政府の下、憂國の印度人は起ち上り、其の印度を思ひ亞細亞を思ふ熱情の切々たるものあるは、只今自由印度假政府首班閣下の演説に於ても之を明らかにせられたる所であつて、印度の爲め將又大東亜の爲め洵に力強き限りである。帝國は印度を米英の桎梏より解放して、其の宿望達成の爲め凡有る支援を送るの熱意を有する事は、屢次の聲明に依つて明らかであるが、自由印度假政府の基礎愈々確立し、同政府の下に蹶起せる同志の初志貫徹の氣魄烈々として結束頗る鞏固を加ふるの現状に鑑み、帝國は茲に印度獨立の第一階梯として自下帝國軍に於て占領中の印度領たるアンダマン諸島及びニコバル諸島を近く自由印度假政府に歸屬せしむるの用意ある旨此の席上に於て闡明する。此の機會に帝國は愈々印度獨立の爲めに全幅の協力を致すの決意を更に鞏固にすると共に、印度の人々の一層の奮起を切望して已まぬのである。而して大東亜の各國は又帝國と志を同うして此上共更に印度獨立の爲め強力なる御支援を賜はらん事を確信し且切望するものである。」

因に十一月七日夜、ボース氏は財團法人日印協會主催の歡迎晩餐會に臨み、日印關係者多數を前に別項所載の如く不退轉の決意を表明した。

ボース氏に謁見仰付らる

天皇陛下には去る十一月十日、自由印度假政府首班スバス・チャンドラ・ボース氏に謁見仰付られ、討英の烽火を掲げて決然起つた同氏の勞を篤く稿はせられた。

政權が印度の支配を維持せんとする英國を抜けたがつて居る事を意味する。最近余は印緬國境に居る余の部下から英當局が同國境から印度軍隊を撤去させ、蔣系の軍隊をして之に代らせるやう命じたとのニュースを受取つた。此のニュースは第一に英當局が自己の下に在る印度の軍隊に信賴を置かなくなつた事、第二に彼等が馬來及び緬甸で印度の軍隊を大砲の餌食とした様に、重慶の軍隊を同様の目的に頤使しようとする事、第三に我々が印度國民軍を率ゐて印度に進軍を開始した場合、我々が戦ふのは英國軍隊では無く重慶軍だと云ふ事を意味する。若し蔣介石が自ら國民主義者であり愛國者であると思ふなら、何故に英國を接けて印度の國民主義者を彈壓する爲めに麾下の軍隊を送つたのであるか、印度は重慶政權は元より今までに至るも蔣介石個人に對し大なる同情を寄せて居る。

然るに蔣介石は印度に於ける英帝國主義に武力援助を與へる事に依つて印度民衆の同情に報いんと欲するのか。若し果して然りとせば、彼は他日神の前で其の責任を問はれねばならぬだらう。不幸にも蔣介石が國民主義の彈壓を援助したのは之が最初では無かつた。昨年彼の軍隊は緬甸に對する英國の支配を維持する爲め緬甸の英軍の側に立つて戰つた。而も緬甸の民衆は中國に對し何等の危害を加へなかつたのである。當時蔣介石は何故に緬甸の英帝國主義に對し武力援助を與へたのか。斯る行爲こそ蔣の姿を緬甸と印度の民衆の眼に英帝國主義の道具又は傀儡として映じさせるものでは無いであらうか。而も蔣介石の犯した過誤は之のみに止まらない。一九四二年の初め彼は印度民衆と印度の指導者をして敵英帝國と妥協させる爲め、英國政府に招待されて印度にやつて來た。彼が印度に行つた以上彼は英國政府に印度の獨立を承認せよと要求すべきでは無かつ

たか。若し蒋介石にして正義、公平、仁愛の情を持つなら、最小限度に於て爲し得る事は印度に在る麾下軍隊に對し英國の側に立つて戰ふ事無く我々の側に立つて英國の壓制者共を相手に戦ふやう命ずる事である。余は日支和平を伴ふ中國の統一と其の英米勢力よりの解放こそ、全亞細亞に新時代を創するものであり、印度の獨立に對する鬪争に有力な刺戟を與へ、而も中國國民が經濟復興と繁榮を取り戻すであらうとの理由から諸君に懇へる。

余は忠實なる國民主主義者として總べての印度人が自由印度の大義に忠實ならんことを欲して居るのと同様に、余は總べての中國人が自由中國の大義に忠實ならん事を欲する。日支間の光榮ある理解は新たな情勢に即應して大膽且つ率直に處理されねばならぬ。余が日支間の和平の望ましい事を語る場合、夫は余の個人的意見に止まらず、全印度國民の希望でもある事を指摘したい。日支兩國の和平を歓望せぬ印度人は一人も居ない。事實マハトマ・ガンダーミも昨年牢獄に繋がれる前「若し印度が解放されたならば、自分は日支間の諒解をつける爲め自ら和平使節として出發するであらう」と昂然言ひ放つた。

斯くして余は中國の統一が今日ほど切實に要求される事は無く、之に反抗する工作は獨り中國に對する罪惡たるに止まらず、印度に對しても全亞細亞に對しても亦同様の罪惡であると信する。余は又今日中國統一への途の最大の障礙は、英米勢力就中米國の勢力であると信する。米英は中國統一の可能性が出て来る場合、常に中國民衆を瞞著し彼等を分離する爲め凡有る宣傳と奸計を用ひんとして居る。例令ば來るべき印緬國境に對する冬季攻勢に於て、彼等は必ず緬甸奪回に成功し、緬甸公路を開して重慶を援助するであらうと

軍事情勢

敵米英の協議に依る東南亞細亞總司部の設置、マウントバッテンの司令官就任、伊太利降伏後の印度洋艦隊強化、南太平洋戰線における日米軍の激戦等は、何れも一九四三年雨季開けの敵側緬甸反攻の前提乃至好條件である爲め、十一月前後を期して敵の一大反攻が緬印國境乃至印度洋周邊に於て行はれるであらうと想像され、九、十兩月の該方面戰線は重苦しい迄の緊張裡に推移した。然し豫期された敵側の攻撃は九月三十日及び十月一日アンダマン、ニコバル方面への空爆並に十月八日モンドウ方面に約二百の敵兵が現れたのみで終つた。此時既に海陸に萬全の備を固めて居た皇軍海鷺は、十月十二日印度洋の敵基地錫蘭島及びマド拉斯港を襲撃して嚴然たる我航空部隊の威力を示し、略々同じ頃北部緬甸に於ては緬甸奪回を企圖して兵力集結中の重慶軍に對し、機先を制して攻擊を開始し、ミトキーナ北方に於て敵約一萬五千を包囲殲滅して敵側の企圖を完全に粉砕した。

此時アラカン及び印度洋方面に至る敵側主力が何故動かなかつたかと云ふ事は興味深い問題であるが、其の理由としては次の如き事項が挙げられてゐる。

一、敵側兵力の大部分を構成する印度兵が信賴し得なくなつた事。（之が東亞に於ける獨立運動の發展に依る事は細論を要しないであらう。）

二、右に基く兵力移動、第一線兵力の減少。（印度軍は概ね第一線を退いて國內警備に轉じ、米英重慶軍及び亞弗利加土人部隊が第一

の印象を全世界にばら撒いて居る。然し余は印緬國境の事情を知つて居る。何となれば其處には既に我々の同志が居り、敵と我々自身の力量の比較を知つて居るからだ。斯くて余は確信を以て斷言する、来るべき作戦に於て英國に依る緬甸奪回を招來する代りに、印度のベンガル、アッサム兩地區を英國の桎梏から解放するであらう事を。米英は日本を打破った後には、中國が亞細亞の支配勢力となるであらうと中國民衆の一部に確信させるべく努力して居る。是は全く老齢危險な宣傳であるが、余は中國の有識者が、斯る宣傳に迷はされないやう希望する。假に日本が此の戦争に敗れる如き事があれば、亞細亞の將來、中國と印度の將來が何うなるかを、過去の亞細亞の歴史に照して見ねばならぬ。若し日本が亞細亞の一流國の地位から轉落したなら、英米は過去に於て爲し遂げた以上に中國に飛び入り、自國の富と資源を培ふ具に供するだらう。英米は更に假に彼等が敗れるとしても、米國は重慶に對し有利な和平を獲得せしむるに足る強力な存在を維持するだらうとの宣傳を行つて居る。

然し斯る考へ方は全く誤りである。彼等が一度敗れ去らんか、米英が如何なる手段を弄しようとも日本を左右する事は出來ないであらう。余は斯る關聯に於て日支間の和平は英米勢力が東亞より一掃される事の前提に於てのみ可能である事を附言する。英帝國主義は今日凋落勢力であり、米國の新帝國主義は英國に取つて代らうとするものだ。

ボース氏は十一月二十二日中華民國から比律賓の首都マニラに飛来し、在比印度人を激励した後、西貢經由で二十五日午後昭南に歸着した。

線主力として配置された。)

三、航空機及び航空母艦の不足。（敵側はバドリオ政權降伏當時地中海方面の空軍及び艦隊の印度洋派遣を夢想したが、獨軍の巧妙な處置に依つて攻勢を取り得る程の兵力を送り得なかつた。）

四、敵側幹部間の不統一

十一、十二月は相互に爆撃の應酬裡に暮れたが、一九四四年一月七日には自由印度假政府及び印度國民軍の緬甸進出が次の如く發表された。

〔自由印度假政府聲明〕 自由印度假政府は今般昭南より緬甸に進出せり。右進出は印度に在る米英軍を殲滅し、印度民衆を其の桎梏より解放する戰の最終段階に一步を劃するものなり。自由印度假政府は此の進出に當り、緬甸政府並に日本軍當局の甚大なる援助に對し深甚なる感謝の意を表する者なり。

其後ボース氏は緬甸國內に於て著々戰闘準備を整へて居たが、本年一月十七日「アザード・ヒンド」紙上に「進め前へ」と題する特別寄稿を以て獨立運動發足以來の經過を回顧し、デリー進軍の意義を明らかにした。其の要旨は次の如くである。

今次大戰の勃發以來印度の獨立運動は數々の障礙を乗り越えて急速なる進歩を遂げた。今之を回顧する時其間に自由への途上に於ける道標にも比すべき種々の進歩の段階を劃し得る。即ち第一の道標は印度の外部が之を助ける目的を以て印度獨立聯盟の指導の下に海外印度人を組織した事である。次で印度國民軍が結成されて印度革命の歴史的事件となつたが、之が第二の而も自由獲得鬪争に於ける最も重要な道標である。第三の道標は統一ある指導の下總動員の合言葉を以て行はれた政治活動の熾烈化である。第四の道標は新

しき指導を得且つ「デリー」の標語を以て行はれた印度國民軍の改組である。

在東亞の印度人は人力、資金及び物資に於て彼等の最大の貢献を爲し始め、之と同時に國民軍の中訓練を終了した其の一部は、一刻も早く戰場に派遣されたいと要求し始めた。自由獲得の鬪争が斯く進展するに至つた時、自由印度假政府の樹立を見たのである。

自由印度假政府の樹立こそ第五の重要な道標である。第六の道標は假政府が日本及び其他七國の友邦から承認された事である。

假政府樹立に續いて大東亞會議が開催され、參加各國から全幅的援助の保證が與へられた。

斯くて大東亞會議の開催が第七の道標を爲すのである。此點に關し東亞の印度人と同様の活動を在歐の印度人が爲し遂げた事を特記したい。在歐の印度人も印度獨立聯盟の許に組織されたのである。

斯の如く洋の東西を問はず在外印度人が政治的に結集され、國民軍が組織された時、次に何をなすべきかは容易に思考し得る所であらう。

上述の如く前進する爲の一切の準備は完了した。運動の段階は最後の勝利に向つて更に飛躍した。第八の道標は日本の厚誼に基くアンダマン及びニコバル群島の自由印度領土と呼稱し得る最初の國土を與へられたる事になるのである。次に新らしき前進基地として一月初旬假政府並に國民軍最高司令部が昭南から緬甸に移駐した。之が第九の道標であり、又印度獨立鬪争の歴史的事件でもある。政府並に軍の緬甸進出の有する歴史的重要性は近き将来明らかとならう。緬甸を我々の未來の活動の足場とした以上、今後我々の注意は悉く印度國內の作戦に向けられるのである。此の作戦は印緬國境の越境

を以て開始される。
斯の如く獨立運動は漸進的だが然し確實な足取りを以て發展して居る。如何なる地上の力も我々を最後の勝利から引離す事は出來ない。過去二三年間の諸事件の背後に見るものは神の御手である。最後の地デリーへの歴史的大進撃の炬火である「越境」夫は第十の道標となるであらう。印緬國境を突破するものは國民軍の戰闘部隊のみでは無い。戰闘部隊には各種の手段で國民軍を抜け全活動を通じて印度獨立の爲め活躍した人々全部が續くのだ。廢墟と化した祖國印度を新らしき自由なる印度とする戦の勝利は我々のものである。だが約束された土地に到着する迄には幾多の密林河川及び山岳がある。從つて全身全霊を擧げて次の行動、即ち印緬國境の突破及びデリー進撃の開始に打込むのだ。凡有る通路に依つて進むとは云へ、道は悉く一箇の終點即ち印度の首都デリーに通じて居るのである。

本年一月二十一日第八十四議會に於て東條首相は次の如く、「印度解放へ實力援助」を行ふ旨を力強く陳述した。
「殊に印度の大衆が依然として英米の暴力の前に塗炭の苦を重ねて居る事は洵に同情に堪へない所である。今や印度解放は我々十億の抑へんとするも抑へ得ざる熱情である。既にスバス・チャンドラ・ボース氏を首班とし、幾多の印度の志士は印度獨立の爲め起ち上つたのである。而して曩に自由印度假政府首班ボース氏を大東亞會議に迎へ、其の席上に於て、帝國は印度獨立の第一階梯として皇軍の占領下にあるアンダマン諸島及びニコバル諸島を近く自由印度假政府に歸屬せしむるの用意ある旨を闡明致した事は御承知の通りである。

爾來スバス・チャンドラ・ボース氏指導の下に印度の自由と獨立

とを獲得せんとする世紀の大事業は著々として進歩しつゝある。既に精神的に飽く無き米英より離反せる印度四億の民衆は、此の正義の大運動に機を逸せず呼應せんとして居るのである。今や此の運動の進展に伴ひ印度民衆の桎梏離脱、獨立騒起の勢は正に全印度を覆はんとして居るのである。斯くて愈々印度に於て自由印度假政府の大旗の進めるゝ日も遠からざるを期待せらるゝのである。之に對し帝國は大東亞の諸國家と共に印度解放の爲め更に實力を以て積極的な援助を送るものなる事を茲に重ねて中外に闡明する次第である。

印度進攻作戦開始

ベンガル州チタゴンを基地として南部緬印國境のアキヤブを窺ふ英印軍は、去る一月九日第五師の主力約二千を以てナーフ河を渡りてモンドウに出撃し、更に二十日頃には英第七師の主力約一万五千が火砲四十門を擁してブチドン北方に進出して來た。敵は前年の敗戦に鑑み慎重な態度を見せたのであるが、敵の反攻企圖を察知した。我が陸軍部隊は二月四日印度國民軍を伴つてブチドン正面より攻擊を開始し、忽ち敵の背後に進出し、敵第五第七の二箇師を包囲した。此の作戦に故國を望んで意氣軒昂の印度國民軍が參加した事は、獨立運動史上劃期的な事件であつて、礪て英印軍及び印度國民への絶大なる影響が現出するであらう。ボース氏は此の歴史的吉日に當り、印度國民軍最高司令官の名に於て次の如き聲明を發表した。

數箇月前印度國民軍の結成が發表されて以來、敵側の宣傳は印度民衆並に英印軍に對して、印度國民軍は實在せず、夫は單なる宣傳に過ぎないと欺瞞する事に狂奔し來つた。即ち彼等は世界に對し、

余が一九四三年末迄に國民軍を引率してデリーに入ると公言したと云ふ虚構の話をまき散らし、其中で余が其の公言を履行し損つたのだと云ふ苦しまぎれの話を捏造して、ラジオ解説を毎日繰返した。余は文全世界に對し、過去二箇月の間我々は計畫通り行動し、而も逐次成功へと前進し來つたが、我々の時間割が聊か延引されて來た事だけは事實である。自由印度假政府及び印度國民軍の最高司令部が一月初旬昭南から緬甸に進駐した時、デリーには神經過敏と恐慌が生じた。敵の戰線は直に彼等の失敗隠蔽の新たなる方法を案出するに至つた。即ち最早や國民軍の存在の事實を蔽ひ得なくなつた彼等は、余と余の軍隊を誹謗するのみか、印度國民軍は其の目指す方向に進撃し得なくなつたと強辯し始めたのである。然し國民軍の將來の活動に就ては現段階に於て他言すべきでは無く、事實が之を雄辯に物語るであらう。然し余は次の事だけは宣言しよう。

我々は計畫通り行動し、時の到來と共に祖國解放への嚴肅なる誓約を履行する事に確固たる自信を持つ。我々は盟邦に絕對の信賴を寄せ而して我々の最後の勝利に關して限りなき確信を持つて居る。

「チャロ・デリー」の合言葉を以て皇軍と共に進撃を開始した印度國民軍は、間もなくブチドン東方の高地を占領した上、一部は長驅敵中を突破してゼガビン、ナケドーラ間の道路遮断作戦に參加し、更に進んで敵司令部を攻撃し、敵英印軍第七師殲滅作戦に偉勳を建てた。尙此の作戦に於ける印度國民軍の對敵宣傳上の貢獻は顯著なものがあり、印度人部隊多數の切崩しに成功した。

印度緬甸方面日誌

(自昭和十八年十月十八日至昭和十九年二月二十九日)

昭和十八年十月

十八日 甲谷陀市廳は八月十六日以降十月十二日迄の餓死者二千四百九十二名、他に街路上の死亡者四千七百九十二名と發表した。

二十日 雨季明け航空作戦に敵必滅を期して待機せる我が緬甸方面

陸軍航空部隊は、戦爆連合の大編隊を以てベンガル州の敵要衝

ツタゴンを急襲し、輸送船、埠頭、市街の軍事施設等に多大の損

害を與へた。

二十一日 昭南市大東亞劇場で開催された印度獨立聯盟全東亞代表者會議はスバス・チャンドラ・ボース氏を主席とする自由印度假政府の樹立を決議した。同政府は直に別稿記載の如く假政府の組織其他に關して初の發表を行つた。

二十二日 交換船帝亞丸はマルマゴンを出帆し日本へ向つた。

ラクシミ婦人部長を中心とする印度獨立聯盟婦人部は昭南中央訓練所を開設し婦人部隊を結成した。

二十三日 帝國政府は自由印度假政府を承認し、同政府の目的達成の努力に對し凡有る協力支援を爲すべき旨發表した。我が戦爆連合の航空隊は印度東部ナーフ河上流のタンブルを強襲した。

二十四日 自由印度假政府は英國及び米國に對して宣戰を布告した。

アンダマン群島のポート・ブレアに敵一機が來襲した。

二十五日 印度獨立聯盟の東京、横濱、神戸各支部の主催にて在日

ル、パレル、フォート・ホワイト及びティデムの四飛行場を強襲した。

十日 天皇陛下には自由印度假政府首班スバス・チャンドラ・ボース氏に謁見仰付けられた。

十一日 天皇陛下には自由印度假政府首班スバス・チャンドラ・ボース氏は午後杉山參謀總長を訪問した。

十三日 ピハール州政府は一九四二年八月の國民會議派反英運動に關連して同州で逮捕された政治犯人三千三百九十三人中本年初頭以降一千五百人が釋放された旨を發表した。

十四日 ボース氏は財團法人日印協會、大政翼賛會興亞總本部、大日本翼賛壯年團共同主催の講演會に臨み、別項所載の如き演説を行つた。

十五日 ボース氏は東京放送局のマイクを通じて獨逸民衆に對し印度國民軍は「デリー」への合言葉を以て蹶起した旨放送した。

十六日 ボース氏は東京放送局のマイクを通じて獨逸民衆に對し印度國民軍は「デリー」への合言葉を以て蹶起した旨放送した。

十七日 ボース氏は東京放送局を通じて印度の同志に掛け大東亞會議の意義を強調した。

十八日 東京に於て開會中の大東亞新聞大會は「印度新聞人激励」の決議を行つた。

十九日 英印軍司令官オーヒンレックは印度中央議會に於て次の如く言明した。「東南亞細亞の司令部は對日攻勢の中心となる事は既定の事實である。印度軍の指揮權に就ては宛も印度軍の一部が地中海に於て同方面の反樞軸軍司令官の指揮下に在る如く東南亞細亞總司令官の下に屬する事は當然である。此の場合英印軍司令官は總司令官と協力する事になる。重慶軍の場合も之と同様で印度に在る重慶軍はマウントバッテンの指揮下に置かれる。又印度

印度人大會を東京で開催した。

二十七日 自由印度假政府の樹立を祝賀する茶會が印度獨立聯盟緬甸地方委員會主催の下に蘭貢に於て開催された。

前印度總督リシリスゴーは家族同伴空路印度から倫敦に歸着した。

二十九日 比律賓政府は自由印度假政府を承認した。

三十日 ウエーヴェル印度總督はベンガル州の飢餓對策として事實上軍政に等しい強壓手段を強行し始めた。

三十一日 チャンドラ・ボース氏はサハイ無住所相、ハッサン秘書官ボンスレー中佐及びラージュ軍醫中佐を從へて羽田に到着した。

昭和十八年十一月

一日 ボース氏は宮中に參内して記帳を行ひ、午後首相官邸を訪問した。

二日 ボース氏は記者團と會見して所信を披瀝した。

滿洲國政府は自由印度假政府を承認した。

重光外相はボース氏歡迎晩餐會を開催した。

イタリア・ファシスト共和國は自由印度假政府を承認した。

五日 滯京中の自由印度假政府代表は大東亞會議に陪席した。

六日 大東亞會議に於ては「大東亞宣言」が滿場一致で採擇され、直に之を中外に發表した。

七日 東條首相は大東亞會議に於てアンダマン及びニコバル諸島を自由印度假政府に與へる用意ありと言明した。

ボース主班は大東亞會議に於て獨立獲得の決意を披瀝した。

ボース主班は日印協會主催の歡迎晩餐會に出席した。

九日 緬甸方面陸軍航空部隊は戦爆連合の大編隊を以てイムバー

政府と總司令部との關係は、政府は直接軍事に關係しては總司令部に協力する。」

ボース氏は南京國民大會堂に於ける歡迎民衆大會に臨み「印度の自由は全亞細亞の自由である」と強調した。

二十日 蘭貢よりの報道に據れば、過去一年間に於ける印度兵の脱走は約十萬に達し、其内一萬八千は叛亂を起して武器を携帶した儘逃亡し、八千乃至九千の逃亡兵は地下運動に參加して居ると。廣東よりの報道に據れば、駐印重慶軍の司令官は此程印支米軍司令官スチルウェルが任命された。

ボース氏は南京政府の陸軍々官學校を訪問した。

デーリー・テレグラフ紙ニュー・デリー特派員の報道に據れば、食糧飢餓に悩むベンガルル州には疫病が大流行する危險があるが、印度政府は之に對し何等施す策無しと。

二十一日 ボース氏上海著、同地放送局を通じて印支間の協力を力説した。

二十二日 ボース氏は比律賓の國賓としてマニラに到着した。

二十三日 ボース氏は在比印度人大會に出席した。

二十四日 ボース氏西貢著。

二十五日 ボース氏昭南歸著。

二十六日 我が航空部隊は東部印度の前進基地フエンニー及びアコ

ーラ飛行場を急襲し多大の戰果を挙げた。

昭和十八年十二月

開催し、日本への感謝・決議文を可決した。ボース首班は本大會に於て演説を試み、印度國民軍の印緬國境への進撃と相俟つて假政府も近く緬甸國內へ進駐する由を言明した。

四日 大本營發表に據れば、帝國陸軍航空部隊は十一月二十五日より十二月二日迄の間に緬甸方面に於て敵機四十三機を擊墜し六機を撃破したと。

ブチドン附近の我が陸軍部隊は同地北方に於て英軍約一千を攻撃した。

翼政常任總務小川郷太郎氏は緬甸國最高國政顧問就任を受諾した。

五日 帝國陸海軍航空部隊は甲谷陀に進攻して大型輸送船四隻を擊破し、敵機十九機を擊墜した。

六日 アンダマン群島の我が基地に敵爆撃機十八機が來襲した。

七日 西南太平洋軍司令官マッカーサーはニューデリーに到着した。ロイター電報に據れば、右は「日本軍に對する来るべき作戦に備へ東南亞細亞軍司令部との間に緊密な連絡を確保する爲めである」と。

十六日 大本營發表に據れば、緬甸方面陸軍航空部隊は十月中旬以來好機を捕捉して印度重慶間の敵空輸機を襲撃すると共に其の基地テンスキー飛行場を攻撃して擊墜四十一機、擊破二十八機の戰果を得た。

アメリカ印度事務相はベンガル州の食糧飢餓に就き下院に於て次の如く言明した。「ベンガル州全體の餓死者の數は不明であるが、一九四三年八月十六日から十二月十一日迄の期間内に甲谷陀市で飢餓に依り病院に收容された者は一萬六千二百八十五人、病院での餓死者は六千百三十六人であった。更に八月一日乃至十二月十日止に一千九百五十名に達したと。

九日 ボース氏は緬甸進出後初の對世界放送を行ひ、祖國並に全世界に在住する印度人に對し、今や印度獨立成功的條件は悉く具備し印度國民軍のデリー進撃も遠く無いと斷言し、絕對勝利の確信を披瀝して印度人の總蹶起を促した。

スチルウェル米軍司令部は印度アッサム州に本據を置く同司令部の航空輸送部隊の司令官に少將ホーリー、副司令官にスチルウェル、副官に少將ドーン・ソターンを夫々任命した旨を發表した。

十日 ボース氏は印度國民軍を閱兵した。

十一日 ボース氏は過般アンダマン、ニコバル兩群島歸屬準備工作委員長として假政府閣僚エイ・ディ・ロカナタン中佐を起用したが、其後任補充の爲め在歐印度獨立運動委員長シク・ナムビアル氏を歐洲に居住の儘無任所相に任命した。

十二日 リスボン電報に據れば、ベンガル州の飢餓は依然深刻を極め、甲谷陀の病院に收容されて居る患者の死亡者數は最近一週間に一千九百五十名に達したと。

十三日 東南亞細亞反樞軸軍司令部は「日本に對する戰闘に參加する爲め西阿部隊が印度に到着した」と發表した。

十四日 ボース氏は過般アンダマン、ニコバル兩群島歸屬準備工作委員長として假政府閣僚エイ・ディ・ロカナタン中佐を起用したが、其後任補充の爲め在歐印度獨立運動委員長シク・ナムビアル氏を歐洲に居住の儘無任所相に任命した。

二十日 アメリカ印度事務相は下院に於てベンガル州の食糧飢餓に關し次の通り言明した。「ベンガル州の飢餓並に疫病で二百萬の死者を出したと言はれて居るが、一九四三年の後半五箇月に於ける死者は一百萬見當と見られる。」

二十日 ウニーヴェル印度總督は甲谷陀に於て時局談を發表し「歐洲の戰局は近く終結を見るであらう。其の時期の到来する迄は對日攻勢は開始されぬ」と陳述した。

二十三日 緬甸方面陸軍最高指揮官はシャン州に於ける軍政を撤廃する旨發表した。

二十四日 ガンディ夫人は病勢悪化し正に危篤に瀕した爲め印度政府は特に會議を開催したが、其の結果夫人を翁の傍に置いた方が良いとの意見に一致した。但しガンディの身柄に就ては戰時中は絶対に釋放しない方針であると。

二十六日 陸軍航空部隊はチタゴンを急襲した。

二十九日 ボース氏はアンダマン群島ポート・ブレアを訪問した。

三十日 ボース氏はアンダマン在住印度人大會に臨んだ。

昭和十九年一月

四日 自由印度假政府は本年初の閣議に於て、來るべき獨立戰爭終了後の將兵に對する敘勳報獎年金制度の具體案を決定し直に之を發表した。「一、敘勳・戰爭終了後生存全將兵に獨立戰章、戰歿した場合は殉國者章が贈與される。二、報獎年金・戰病死者の遺族には報獎金、戰傷者には年金制度並に官吏への轉向が優先的に考慮されて居る。」

七日 自由印度假政府は昭南から緬甸に進出し「右進出は印度に在る米英軍を殲滅し、印度民衆を其の桎梏より解放する戰の最終

二十六日 東南亞細亞反樞軸軍司令部は大將ジョウジ・ジフオードを陸軍部隊司令官に、中將スリムを英第十四軍司令官に任命した。

昭和十九年一月

一日 蘭貢大學が再開された。

二日 自由印度假政府は國家統一と國民の士氣昂揚に關し次の如き新方針を決定した「一、ヒンドゥスタニー語を印度の國語とする。一、印度人間の挨拶にはジャイ・ヒンド（印度の勝利の爲めに）を使用する事。一、今日の三色旗を印度の正式の國旗とし、スド・スク・チャイン（自由なる幸福と恵み）なる言葉を以て始まる現在の歌を國歌とする。マドラを印度國家の表徴とし、チャロ・デリ（進めデリーへ）を革命成功迄の戰争に邁進する國民の合言葉とする。一、食事、衣服等有らゆる生活刷新計畫は政府で慎重に研究し隨時決定して之を行に移し、先づ東亞在住印度國民から之を實踐せしめる。」

四日 緬甸方面帝國陸軍部隊はブチドン正面より英印軍二箇師に對して攻撃を開始し、印度國民軍も之に協同して進撃に移つた。陸軍航空部隊はブチドンに進攻した。

五日 陸軍部隊の一部はトンバザールを占領し、更にマユ河を強行渡河して敵軍包囲の態勢を整へた。

六日 トンバザールより挺進した我が支隊はナギアンキンの橋梁を爆破し、モンドウ方面敵軍の退路を遮断した。

陸軍航空部隊も地上部隊と密接に協力中。

七日 海軍航空部隊は錫蘭島カルクタの敵陣を爆撃し、陸軍航空

部隊はチタゴン沖に進攻した。

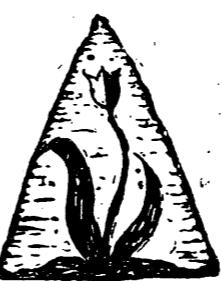
十一日 ボース首班は〇〇に待機する國民軍後續部隊を閱兵した。
海軍航空部隊は甲谷陀を爆撃した。

二十一日 ガンヂー夫人重態に陥る。印度政府は特效薬ベニシリンを甲谷陀より空輸する事に決定した。

二十二日 ガンヂー夫人ブーナに於て逝去、享年七十四。

二十九日 大本營はアラカン方面の作戦に就て次の如く發表した。

一、二月九日以降英印軍第七師團主力をブチドン西北方シンゼイワ盆地附近に包囲猛攻中なりし緬甸方面帝國陸軍部隊は、二月二十四日迄に其の大半を殲滅し、目下一部を以て殘敵を掃蕩しつゝ更に爾後の作戦準備中なり。二、印度國民軍亦我と協力して大なる戰果を挙げつゝあり。



マニプール藩王國素描

マニプールは其の周邊を丘陵によつて取囲まれた一大盆地であつて、總面積は約八千六百平方哩、盆地の長さは約三十哩、幅は二十哩である。盆地を流れる主なる河川はイムパール、イリル、トバル、ナムバル及びナムボールの諸川である。ナムボール川は一旦ロクタック湖に注ぎ更に同湖水から流れ出してコールタック川となる。

盆地は海拔約二千五百呎の高地であるから、氣候は涼しく快適である。冬期には夜間多量の霜が降り、太陽が中天に昇る迄深い霧に閉ざることが屢々ある、首都イムパールにおける平均年雨量は約七十吋であるが、丘陵地帶では百吋にも達する。

會務記事

ボース首班一行歡迎晚餐會

自由印度假政府スバス・チャンドラ・ボース首班は其の閣僚、參謀長等一行と共に來朝したるを以て、本會に於ては去る十一月七日午後五時より大東亞會館に於て歡迎晚餐會を開催せり。開宴後先づ大臣會頭の歡迎の挨拶後、ボース首班は在印米英軍擊滅の烈々たる決意を表明し、引續き種々懇談を交へて午後七時半一旦宴を撤し、來賓並に本會幹部は歌舞伎座に於ける大東亞外務兩大臣招待の觀劇會に臨みたり。歡迎晚餐會の出席者左の如し。(敬稱省略)

池田嘉吉	生尾太郎	石橋鎮雄
柿坪正義	木村日紀	北川要之助
北澤直昭	侯爵小村捷治	来馬琢道
葛生能久	鹿子木員信	樹源次郎
松浦徹夫	メタニ	三宅哲一郎
宮田榮太郎	三角佐一郎	マンガンマル
永島義治	ナイル	永田藤次郎
中川末吉	夏秋龜一	根岸由太郎
西巖	野口米次郎	沼野英一
岡田永太郎	岡田守恵侯爵	大隈信常
岡倉古志郎	大隈房江	大塚俊雄
大谷登	大鳥居彥司	ラムチャンド
坂上健次	紫田一能子爵	ラムチャンド
瀧谷友三郎	信夫淳平	瀧澤昌貞
副島八十六	高島正雄	高岡大輔
照道	高島米峰	田中善立
田中完三(代)	高良富子	矢谷一郎
山本三藏	柳喜美子	吉田勤生
米澤菊二	吉田勲生	吉田丹一郎

大隈會頭挨拶

大東亞の戰局が愈々熾烈の度を加へつゝある今日、亞細亞に於ける最も古く最も偉大なる印度國民の指導者各位を迎へて、本日此處

最高顧問	ラスピハリ・ボース
出席者	スバス・チャンドラ・ボース
深井龍雄	ジー・ケー・ボンスレー
國民軍參謀長	エ・エム・サハイ
無任所大臣	エデューカー・サハ
最高司令部付	ラヂュー・軍醫中佐
首班祕書	ハッサン
來賓	平井正信
最高顧問	ラスピハリ・ボース
出席者	スバス・チャンドラ・ボース
深井龍雄	富士瓦斯紡績
廣井辰太郎	橋本幸太郎
會務記事	六